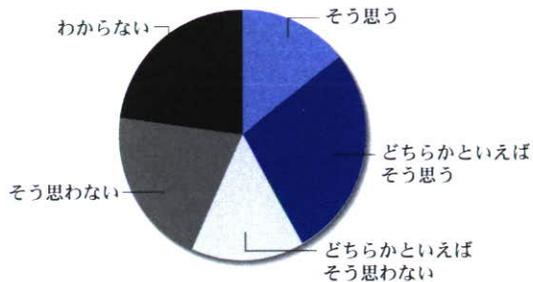


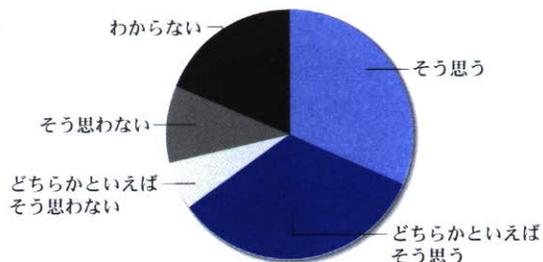
27) 遺伝病はありふれた病気である。

- |                  |     |
|------------------|-----|
| ① そう思う           | 4 3 |
| ② どちらかといえばそう思う   | 8 2 |
| ③ どちらかといえばそう思わない | 4 4 |
| ④ そう思わない         | 6 1 |
| ⑤ わからない          | 6 8 |



28) 親が正常でも子どもが遺伝病になることがある。

- |                  |       |
|------------------|-------|
| ① そう思う           | 9 5   |
| ② どちらかといえばそう思う   | 1 0 1 |
| ③ どちらかといえばそう思わない | 1 9   |
| ④ そう思わない         | 3 0   |
| ⑤ わからない          | 5 6   |



ひとりひとりの遺伝子のわずかな違いによってその人の「体質」がある程度決まってくるのですが、その「体質」の中には特定の病気を発病することも含まれます。

遺伝子や染色体の構造や量の変化が原因で起きてくる病気を遺伝病といいます。ただし、変化した遺伝子を持っていても必ずしも発病するわけではありません。

そのため親が病気でなくても子どもが遺伝病を発病することがあります。劣性遺伝という遺伝形式をとる病気は通常こうした発病パターンをとります（劣性遺伝病についての説明は設問38の〈コメント〉を参照してください）。

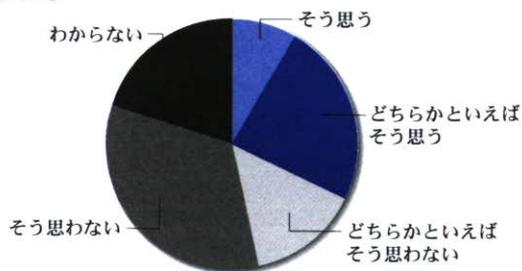
また、両親が病気の原因になる遺伝子を持っていないのに子どもが発病する場合もあります。これは精子や卵子に新たに遺伝子の変化が生じたため、これを「突然変異」といいます。

実際、突然変異を起こした精子や卵子はすべての人が持っています。突然変異は新たな病気の原因になることもありますが、個体にとって有利な変化を生じる場合もあります。こうした突然変異の蓄積を「進化」といいます。

突然変異という現象があるからこそ私たちの祖先はサルからヒトへと進化することができたわけです。

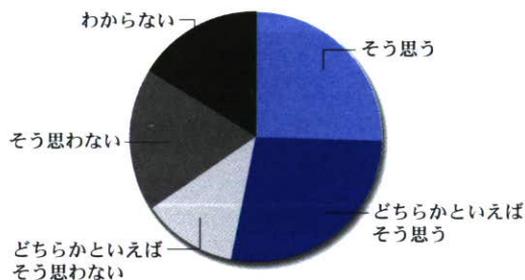
29) 遺伝病を持つ人はなるべく子どもを産まないほうがよい。

- ① そう思う 2 5
- ② どちらかといえばそう思う 7 1
- ③ どちらかといえばそう思わない 4 3
- ④ そう思わない 1 0 0
- ⑤ わからない 6 0



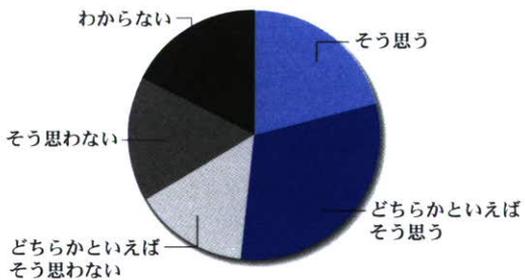
30) 病気の子どもが生まれないように、胎児や受精卵を積極的に調べるのは有意義だ。

- ① そう思う 7 7
- ② どちらかといえばそう思う 8 4
- ③ どちらかといえばそう思わない 3 7
- ④ そう思わない 5 6
- ⑤ わからない 4 9



31) 日常の診療や健診などに遺伝子の検査を積極的に導入するべきだ。

- ① そう思う 6 3
- ② どちらかといえばそう思う 9 3
- ③ どちらかといえばそう思わない 4 4
- ④ そう思わない 4 9
- ⑤ わからない 5 3

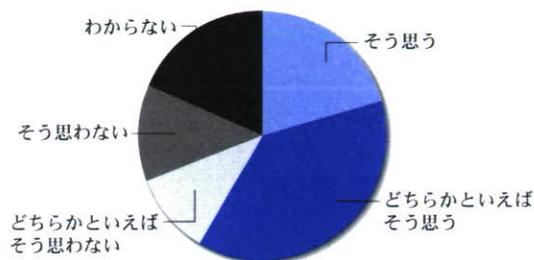


新しい技術は私たちにとって大きな福音となりうる一方で、予期せぬ問題を生み出す可能性もあります。

医療の場においても新しい技術を導入する際には、その技術によってどのような人にどのような利益が期待できるのか、逆に不利益をこうむる人が出てくる可能性はないのか、倫理的、社会的、法的な問題が生じる危険性はないのか、など多くの側面について慎重な検討を加えた上で、その臨床応用の是非を判断していく必要があります。

32) 今の社会には遺伝病の人に対する差別がある。

① そう思う	6 2
② どちらかといえばそう思う	1 1 5
③ どちらかといえばそう思わない	3 2
④ そう思わない	3 8
⑤ わからない	5 6



多くの回答者が遺伝病に対する差別の存在を感じているようです。ではなぜ差別が生じるのでしょうか。

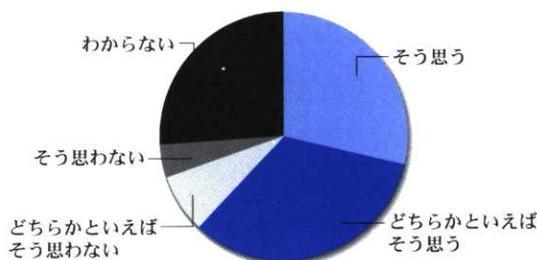
理由は数多くあるかもしれませんが、しかし、人種差別、性差別、部落差別など、多くの差別はほとんどが誤解や無知によるものです。

遺伝病とともに生きる人たちが根拠のない差別を受けたりすることがないように、すべての人が遺伝や遺伝病についての正しい知識を持つ社会にしていくことが重要です。

そのためにも多くの人に「遺伝」に興味を持っていただきたいと思います。

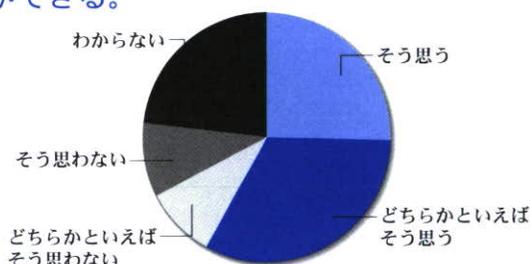
33) 遺伝病でも発病を防ぐことができる。

① そう思う	8 7
② どちらかといえばそう思う	1 0 1
③ どちらかといえばそう思わない	2 3
④ そう思わない	1 3
⑤ わからない	7 9



34) 遺伝病は医学の進歩によって将来的になくすことができる。

① そう思う	7 7
② どちらかといえばそう思う	9 9
③ どちらかといえばそう思わない	2 8
④ そう思わない	2 9
⑤ わからない	7 0



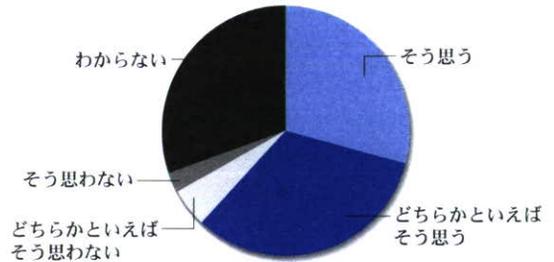
先ほど述べた「突然変異」という現象がある限り、病気の原因になる遺伝子や染色体の変化が地球上の人類全体から消滅することはありません。

私たちが最終的に目指すのは遺伝病の原因になる遺伝子を持つ人を排除したり、次の世代に伝えないようにしたりすることではなく、その遺伝子を持っていても適切な治療法や予防法によって他の人と変わりのない生活を送れるようにすることです。

現在でも治療や生活上の注意によって発病を予防したり症状を軽くしたりできる遺伝病が数多くあります。

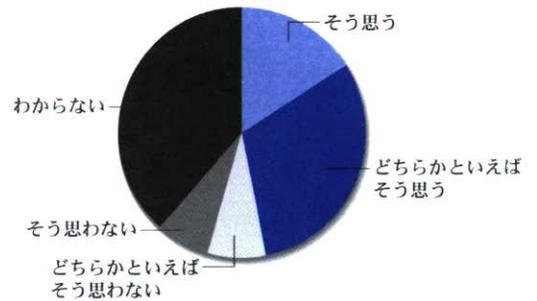
35) 遺伝病の治療には遺伝子治療を行う必要がある。

① そう思う	8 8
② どちらかといえばそう思う	9 9
③ どちらかといえばそう思わない	1 5
④ そう思わない	8
⑤ わからない	9 2



36) 遺伝病の人に遺伝子治療を行えば病気が子どもに伝わるのを防ぐことができる。

① そう思う	4 8
② どちらかといえばそう思う	9 3
③ どちらかといえばそう思わない	2 3
④ そう思わない	2 1
⑤ わからない	1 1 6



ほとんどの人が遺伝子治療という言葉を目にしたことはあるものの、その実際についてはなかなかイメージしにくいかもしれません。

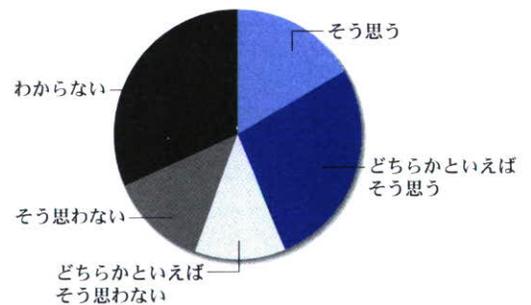
一部の遺伝病を除けば、遺伝病に対して遺伝子治療が行われることはほとんどありません。現在行われている遺伝子治療はその多くが遺伝性ではない癌や血管の病気を対象にしています。

遺伝子治療とは、いわばDNAを用いた薬物治療というべきもので、病気を生じている場所に特定のタンパク質を産生させるようなDNAを送り込み、そのタンパク質によって病気を治療しようとするものです。

つまり遺伝子治療とは「遺伝子を治療する」のではなく「遺伝子で治療する」ものだけということです。治療を受ける人がもともと持っている遺伝子に介入するものではありませんし、そのような介入は倫理的にも認められません。

37) 遺伝子組み換え食品を食べることで人の遺伝子が増える可能性がある。

① そう思う	5 0
② どちらかといえばそう思う	8 2
③ どちらかといえばそう思わない	3 6
④ そう思わない	3 8
⑤ わからない	9 6



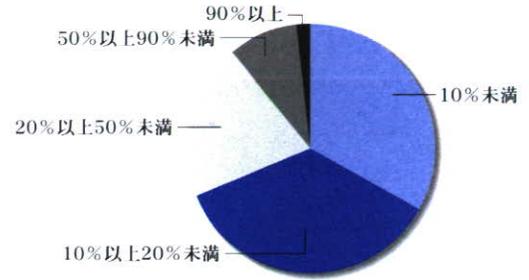
遺伝子組み換え食品とは、特定のタンパク質が合成されるように遺伝子进行操作した動植物、またはそうした動植物を原料に用いた食品のことです。遺伝子組み換えの目的は病害虫に対する抵抗力を強くして収量を高めたり、日持ちをよくしたりすることなどです。

現在議論になっているのは、操作された遺伝子によって作られたタンパク質が、それを食べた人に対して有害に作用する危険性や、環境への悪影響の可能性といった問題についてです。遺伝子組み換え食品に組み込まれた遺伝子そのものが私たちの身体に影響するわけではありません。

実際私たちは肉や魚、野菜など多くの「生物」を食べていますし、当然それらの細胞の中には遺伝情報が書かれたDNAが含まれています。DNAを食べても消化されてしまいますから、私たち自身の遺伝子に直接影響することはありません。

38) 遺伝病の原因になる体質的な因子を持つ人は、  
全人口の何パーセントぐらいいると思いますか。

① 10%未満	9 0
② 10%以上 20%未満	9 7
③ 20%以上 50%未満	5 5
④ 50%以上 90%未満	2 5
⑤ 90%以上	5



正解は 100%です。私たちは誰でも病気の原因になる遺伝子の変化を数個は持っているといわれています。それなのに多くの人が発病しないのは、2つある遺伝子のうちひとつだけに変化があり、もうひとつは問題なく機能しているためです。

私たちは、一部の遺伝子を除けば両親から1コピーずつの遺伝子を受け継ぎ、そのため同じ遺伝子を2つずつ持っています。

2つの遺伝子の両方に変化を生じた人だけが発病するような遺伝病を「劣性遺伝病」といいます。これは「劣っている」という意味ではなく、単に遺伝形式を示すだけのものです（もっともこのような誤解を招きやすい名前を変えていくべきかもしれません）。

変化のある遺伝子を1つだけ持っていて発病しない人を「保因者」といいます。保因者の頻度は決して低くありません。1万人に1人が罹患する劣性遺伝病の場合（長野県なら患者数は約220人）、50人に1人は保因者です（長野県なら保因者数は4万4千人）。

県内に患者さんが200人程度という頻度の低い病気でも、学校のクラスに1人ぐらいは保因者がいることになります。このような遺伝病はたくさん知られていますから、計算上も病気の原因になる遺伝子をひとつも持っていない人というのは存在しません。

偶然保因者同士がカップルとなり、病気のお子さんが生まれた時に、初めてふたりは自分が保因者であったことに気づくことになります。

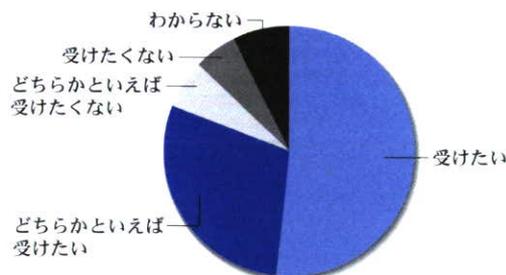
遺伝の問題が特定の人の問題ではなく、誰でも当事者となりうることをぜひ理解してください。

もしあなたの遺伝子を調べることであなたの体質や将来の病気がわかるならば検査を受けたいですか。

あなたの考えに最も近いものをひとつ選び、番号をマークしてください。

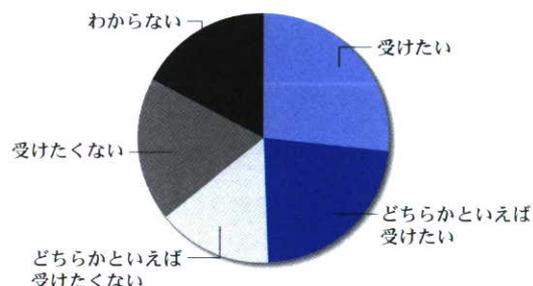
39) 予防法や治療法がある病気の場合。

① 受けたい	156
② どちらかといえば受けたい	88
③ どちらかといえば受けたくない	19
④ 受けたくない	17
⑤ わからない	22



40) 予防法や治療法がない病気の場合。

① 受けたい	80
② どちらかといえば受けたい	68
③ どちらかといえば受けたくない	44
④ 受けたくない	56
⑤ わからない	52



予防や治療ができるのであれば検査を受けたいという人が大多数でしたが、一方で予防法や治療法がない場合には検査を受けたいという人の数はだいぶ少なくなっています。

遺伝子を調べることは、自分の体質を早めに知り、可能であれば早めの対応ができるようになる一方で、将来のことがわかってしまい不安が強まる可能性や、家族への影響も考えなければなりません。

検査によって何がわかり、それをどう将来の健康管理に役立てることができるのかを慎重に考える必要があります。こうした問題を一緒に考え、支援する医療が「遺伝カウンセリング」です。

## <最後に>

「遺伝」の問題はごく一部のみに限られたことから、自分とはあまり関係がないものと感じていた方が多かったのではないのでしょうか。しかしよく考えてみれば、遺伝という現象があるからこそ私たちは両親からの体質を受け継いでこの世に生まれてきたわけですし、それゆえ遺伝に関する問題もすべての人が当事者になる可能性があります。しかしながらこれまでの医療では遺伝に関する悩みや問題を解決するためのしくみが十分に整備されてはいませんでした。

遺伝カウンセリングは、遺伝性疾患の患者さんや遺伝について不安や悩みを抱えている方のための医療です。信州大学医学部附属病院遺伝子診療部では、遺伝カウンセリングを通じて「遺伝」に関する心配、健康面の不安、ご家族の問題などを一緒に考えてまいります。そのために私たちは、臨床遺伝専門医や認定遺伝カウンセラー、臨床心理士、専任看護師がさまざまな領域の遺伝カウンセリングに対応できるようにしています。何かお困りのことがありましたら、遺伝子診療部へお気軽にご相談ください。

遺伝カウンセリングは毎週火・金曜日（祝祭日、年末年始は除く）に行っています。遺伝カウンセリングは完全予約制です。電話で予約してください。専属の看護師が相談内容をお聞きします。電話：0263-35-4600（信州大学医学部附属病院代表）交換台で「臨床遺伝外来へ」とお申し付けください。

信州大学医学部附属病院遺伝子診療部ホームページ  
<http://genetopia.md.shinshu-u.ac.jp/>

## 劇団 GENETOPIA 「あなたのそばに」 シナリオ

演出 櫻井 晃洋

台本 玉井 真理子

登場人物： 悠子、邦夫（悠子の婚約者）、真弓（邦夫の妹）、ジュン（真弓の友人）、邦夫の父母

【シーン1：悠子のモノローグ】悠子のオフィス。

悠子はパソコンに向かっており、電話をとって対応したりしている。机の上にはノートパソコン、受話器、積み重なった多少の書類。

悠子：（明るい調子で）私の名前は、木下悠子。歳は 33 歳。女子社員の中では古株です。若い女子社員からは結構頼りにされていて、よく人生相談を持ちかけられます。そんなわたしに、まさに人生の相談にのってもらいたいと思うようなことがおきました。ある人と結婚することになったのです。

会社で大事な仕事を任されることも多くなり、このまま結婚しないでいてもいいかなと思いはじめていた矢先でした。ある人からプロポーズされたのです。半年ほど前のことでした。彼は職場の同僚です。とくに異性として意識したことはなく、突然のプロポーズに驚きました。でも、仕事を通して誠実な人であることを知っていましたので、結婚しようと決めました。（間）

（まだあまり深刻ではない口調で）（客席のほうに顔だけ向けて）ところが、大きな問題があったのです。（ゆっくり顔を戻し、またコンピュータに向かって仕事を続けながら）プロポーズされたあと、田舎の母に電話で報告をしました。当然喜んでくれると思ったのですが、なぜか様子がおかしいのです。母は、えっ、と言ったきりしばらく絶句し、大事なことからあまり慌てて決めないようにとだけ言って、今手が離せないからと、そそくさと電話を切ってしまいました。気になっていたら、次の日に、母から電話がかかってきて、実はお父さんの病気のことなんだけど、と切り出すのです。（間）

（しんみりと回想するように）私の父は、5年前に亡くなりました。わたしが高校に入る頃から、少し様子がおかしかったのですが、私は上京して大学に入り、そのまま東京で就職してしまいましたので、父の病気のことにはよくわかっていませんでした。神経がおかされる病気で治らない。進行もする。そんな病気だと、母から聞かされたときはショックでしたが、病名については、詳しく訊ねてみようともしませんでした。それに、帰省するたびに少しずつ悪くなっているのがわかり、そんな父の姿を見るのが辛くて、あまり帰らなくなっていました。

母によれば、父の病気は遺伝する病気だということです。祖父も、実は同じような病気で亡くなっているらしいのです。母は、結婚するなら、相手の人に病気ことを承知しておいてもらいなさい、と言います。母から電話があった日から、彼にどう切り出したらいいいものかと、私は迷い続けていました。

そんなとき、本屋さんで立ち読みをしていて、偶然父の病気の名前を見つけました。はじめて母から教えてもらった父の病名です。本には、男女に関係なく、50%の確率で遺伝すると書いてありました。からだが震えました。（次

の文、一気にわたしは、いてもたってもいられなくなり、すぐに彼に電話をして、父の病気のことをいっきに話してしまいました。（少し落ち着いて）彼は、そんなの気にしないから、予定通り結婚しようと言ってくれました。

ところが、彼がそのことを家族に話したら、結婚を反対されてしまったというのです。彼は今日も、家族を説得してくれているに違いありません。

（野球中継の音が小さく聞こえ出し次第に大きくなる、暗転。シーン2までは野球中継の音だけが続いている）

【シーン2：邦夫の家の居間～邦夫と父母】

テレビからもれる音（野球中継）が聞こえている。明転。父（下手手前）と母（奥）はテーブルの椅子にすわり、邦夫はテーブルの脇（上手側）に座って両手をテーブルにのせ、母に直面している。父は舞台下手斜め後ろのテレビに見入っている

邦夫：だから、母さん、何度言ったらわかってもらえるんだよ。

母：邦夫の言ってることは、お母さん、さっぱりわからないわ。とにかく、遺伝病の血筋の人を、この家に入れるわけにはいかないのよ。

邦夫：結婚するのは、家じゃなくて、（自分の胸を指差しながら）この俺なんだから。

母：だから言ってるんじゃないの。（邦夫を指差し）あ・な・た・が苦勞するのよ。悠子さんが病気になって、長患いしたら、いったいだれが面倒みるの？

邦夫：病気になるって決まったわけじゃないだろ。

母：だって、邦夫、50%の確率で遺伝する病気だって言ったじゃない。ふたりにひとりってことでしょ？悠子さんってひとりっ子なんだから、ひとりしかいないってことはその人に病気が出る可能性が高いってことなんじゃないの？（邦夫、首を横に振りながら聞いている）

邦夫：だからあ、遺伝する確率っていうのはそういうもんじゃないんだよ、母さん。このあいだ説明したじゃないか。もう一度説明しようか。

母：（ヒステリックに）もう、たくさん！難しいことは、聞きたくないわ。（耳をふさぐ）

邦夫：すぐそれだ。…うるさいなあ、テレビなんて誰も見てないのに。

（邦夫、テーブルのリモコンを下手に向かって操作、（テレビの音がやむ。）父は一瞬邦夫をみるが、文句も言わずおずおずとテーブル上の新聞を広げ始める）

母：（パンフを掲げるようにしめしながら、声色を変えて）ねえ……せめてこの病院に行って、悠子さんに検査受けてもらいなさいよ。お母さん、ほら、こうして病院のパンフレットもらってきたんだから。（パンフレットを邦夫のほうに差し出しながら）

邦夫：（パンフを一瞥し、すぐ目を離す）パンフは持った

まま) 将来どっちがどんな病気になるかなんて、わかんないんだよ。おれの方こそ、事故や病気で悠子に苦勞をかけるかもしれないだろ。でも、そんなこと気にしたら、結婚なんてできないじゃないか。母さんは、俺が結婚できないほうがいいって言うのか？

(邦夫のせりふの途中で父、新聞を折り返す。客席側には劇団の全面広告)

母：そんなこと言ってませんよ。

邦夫：こんな病院のパフレットまで勝手にもらってきて、遺伝子の検査かなんか知らないけど、俺はそんなこと悠子に言うつもりはないからな。(パフレットを母のほうに押し返す)

母：じゃあ……ここに、せめて相談に行ってもらっちゃいよ。聞いてみたんだけど、結婚する当人同士が行かないとダメなんですって。うちの嫁になる人のことなんですけどって、粘ったんだけど、ダメだって言うの。

邦夫：母さん、先走っているんなことしないでくれよ、頼むからさあ。

(あらたまって母は邦夫に向かって)

母：お母さんは、あなたのために思って…。(涙ぐみエプロンで涙をぬぐう)(突然顔をあげ、父のほうを向き、新聞をわしづかみにして放り捨てる。怒った声で)ちょっと、あなた、あなたも何か言ってくださいよ、新聞ばかり読んでないで。

父：邦夫だって大人なんだから、好きなようにさせればいいじゃないか。邦夫も、あんまり母さんに心配かけるなよ。

(話しながら席を立ち、下手に退散)

邦夫：父さん、いったいどっちの味方なんだよ。

(暗転)

【シーン3：邦夫の家の居間～邦夫と真弓】(明転)

邦夫はテーブルの椅子にすわり、ひじをつき両手で頭を抱えている。下手から妹の真弓がマグカップを持って入ってくる。

真弓：大変そうだね、お兄ちゃん。

邦夫：(顔を上げながら)なんだ、真弓。聞いてたのか？

真弓：(椅子に座りながら)聞いてなくてもわかるわよ。

この間からおんなじ話しばっかりしてるじゃない。

邦夫：母さんが、うんって言うてくれないからなあ。

真弓：お兄ちゃん、ずるいよ。

邦夫：なんだよ、突然。

真弓：ずるいから、ずるいって、言うてんのよ。

邦夫：なんで、俺がずるいんだよ。

真弓：お兄ちゃん、悠子さんと結婚する自信がなくなっちゃったんじゃないの？

邦夫：おい、真弓、ちょっと待てよ。結婚したいから、こうして毎晩、母さんを説得してるんだろ。

真弓：じゃあ、なんで悠子さんのお父さんの病気のこと、母さんに話したの？

邦夫：えっ？……だ、だって、それは、大事なことだと思ったから。

真弓：別に話さなくたってよかったじゃない。話す必要なんて本当にあったの？

邦夫：それは…。うちは、なんでも、いろんなこと家族で

話し合ってきたから…。

真弓：母さんに、悠子さんとの結婚反対されて、ホントはホッとしてるんでしょ。

邦夫：真弓、いいかげんにしろよ。

真弓：ほーら、凶星だ。

邦夫：違うって、言うてんだろ。

真弓：だいたい、お兄ちゃん、今いくつなのよ？もう、三十過ぎてんでしょ？いい大人じゃない。

邦夫：えらそうな口きくなよ。

真弓：大人なら、あしたにでも、悠子さんと二人で婚姻届出してきちゃえばいいじゃない。

邦夫：…あしたはダメだ…は忙しいんだ。

真弓：ばっかみたい。そういう問題じゃないでしょ。本当に悠子さんと結婚したいなら、いくらでも結婚できるはずなのに、なんでそんなに迷うのかって言うてんのよ。

邦夫：だから、迷ってるわけじゃないんだって。

真弓：(邦夫に背を向けるように向きを変えて)あーあ、悠子さんもなんでお兄ちゃんみたいなのに惚れたんだろね。こんな優柔不断な男にひっかからなくなつて、悠子さんみたいに素敵な人だったら、いくらでもいい人いただろうに。

邦夫：お、おまえ…まさか、悠子に会ったのか？

真弓：(向き直って)会社のホームページに、写真入りでのつたの、たまたま見つけたのよ。

邦夫：へえ、そうなのか。

真弓：お兄ちゃんには、もったいないね。

邦夫：おまえには関係ないだろ。それに、おまえだって、結婚相手から、実はうちは遺伝病の家系だって、いきなり言われたら驚くだろ？しかも、治らない病気だよ。

真弓：驚くかもしれないけど、だからって結婚やめたりしないわよ、絶対に。

邦夫：絶対にか？

真弓：うん、絶対に。

邦夫：いざその場になったら、どうだか…。

真弓：将来、どっちがどんな病気になるかなんて、わからない。それって、さっきお兄ちゃんが言ったんだよ。

邦夫：それは…まあ、そうだけど…。(暗転)

【シーン4：真弓の大学のキャンパス～真弓とジュン】

(明転) 真弓、舞台下手から現れる。手にはノートとコンビニの白い袋。

真弓：ジュンちゃん、待った？

ジュン：(ベンチに座り携帯電話でメールを打っているが、顔を上げて)いや、俺も今きたばっか。(携帯をポケットにねじ込む)

真弓：よかった。これ買って来たんだけど、飲む？(袋からペットボトルを取り出して渡す)

ジュン：ああ、ちょうど、のど乾いてたんだ。

(真弓、ジュンの隣に座る)

真弓：ねえ、ねえ、ジュンちゃんちのお姉さんの結婚、どうなった？

ジュン：(ペットボトルのキャップをひねりながら)どうって。親父もお袋も最初はいろいろ言うてただけど、できちゃったんならしかたないかって、結局この間籍入れたみた

いだよ。

真弓：へえ、そうなんだ。ジュンちゃんもおじさんになるんだあ。

ジュン：やだよ、おじさんなんて…。(一口飲む)

(真弓、飲んでいるジュンを思いつめたように見つめている)

真弓：ねえ、ジュンちゃん。

ジュン：何だよ、急にあらたまって。真弓、も、もしかして…。(うろたえて真弓の顔とお腹に目をやる)

真弓：(手を振りながら)違う、違う。ジュンちゃんのお姉さんのようなことじゃないって。

ジュン：びっくりさせんなよ。まだ学生なんだからさ。(正面を向く)

真弓：(正面を向いて)でもさあ、できちゃった結婚っていうのも、いいわよね。何も考えなくていいもんね。

ジュン：おいおい、何言い出すんだよ。それより、おまえんちの兄貴の結婚のほうはどうなった？

真弓：それがさあ、大問題が起きちゃって…。

ジュン：なに、大問題って？

真弓：こんなこと人に言っているのかどうか、わかんないけど、実はね…お兄ちゃんの相手の人っていうのが、遺伝病の血筋の人だったのよ。

ジュン：遺伝？血筋？なんだか難しい話になってんだなあ、おまえんち。

真弓：わたしも、難しいことはよくわかんないんだけどね。でも、来月くらいにうちに挨拶に来るとか言っていたのは、とりあえず流れちゃった。

ジュン：結構深刻じゃん。

真弓：そうなの。もう、やんなっちゃうわよ。お兄ちゃんとお母さん、毎晩けんかしてる。

ジュン：でもさあ、遺伝病の血筋とかって聞かされたら、やっぱ、ビビるよなあ。

真弓：(ジュンのほうに引き直って)えっ？それって、どういうこと？

ジュン：(真弓のほうを向いて)えっ？真弓、平気なのか？たとえばさあ、俺が遺伝病の家系ってわかってたら、それでもいいって思うわけ？

真弓：え——っ、じゃあ、すぐに別れるわけ？

ジュン：すぐに別れるかどうかは、わかんないけどさあ、でも、結婚とかってことになったら、ちょっと考えるよなあ。それが普通なんじゃないの？

真弓：じゃあ、あたしのうちが遺伝病の血筋だって聞いたら、ジュンちゃんどうすんの？

ジュン：はあ？真弓んちって、遺伝病の家系だったの？

真弓：違うわよ。たとえばの話。

ジュン：なあんだ、びっくりさせんなよ。じゃあ、別にいいじゃないか、そんな難しいこと考えなくても。(正面を向き直す)

真弓：(正面を向き直す)とりあえずはね。でもわたし、お兄ちゃんのことがあったから、ちょっと遺伝ってことに興味もってね、って言うかあ、うちのお兄ちゃん頼りなくて見ていられないもんだから、いろいろ調べてみたのよ。

ジュン：ふーん。真弓、それで最近図書館によく行ったのか。

真弓：うん。内緒にしててごめんね。そうそう、医学部の

田中君にもいろいろ教えてもらったんだ。

ジュン：医学部の田中？ああ、あのキザなヤツ？

真弓：そう、2年までサークルにいたじゃない。ちょっとキザだとは思うけどさあ、でも、いい人よ。田中君のお父さんって、お医者さんなんだって。田中君、お父さんにも聞いてくれて、本とか借りてきてくれたの。

ジュン：田中って、真弓に気があんじゃねえの。

真弓：違うって、そんなんじゃないって。

ジュン：真弓が違って、向こうはその気かもしれないじゃん。気をつけるよ。

真弓：ジュンちゃん、もしかして、やきもちやいてんの？

ジュン：ち、違うよ。それで、田中から借りた本って、役に立ったわけ？

真弓：それがねえ、難しすぎて…。

ジュン：ふん、全然役に立たなかったってわけか？

真弓：本は役に立たなかったけど、田中君の解説は役に立った。

ジュン：ふーん。解説ねえ。

真弓：どんなに健康なカップルからも、遺伝病の子どもは生まれるんだって。

ジュン：(真弓の顔を見て)はあ？遺伝病じゃない人から遺伝病の子が生まれるって、なにそれ？わけわかんねえ。

真弓：わたしも最初はわけわかんなかったけど、田中君の解説聞いたら、なるほどって思った。それとね、人類みな保因者なんだって。

ジュン：人類？人類がなんだって？

真弓：だからあ、人類、みな、保因者、って言うらしいよ。遺伝学の常識なんだって。

ジュン：人類みな保因者って、ますますわけわかんねえよ。

真弓：だれでも、病気の遺伝子をいくつかは持ってるんだって。

ジュン：(再び真弓を見て)じゃあ、俺も将来なにかの病気になるって、決まってるの？

真弓：そういうことじゃないらしいよ。

ジュン：そういうことじゃないって、どういうことだよ。真弓、田中からいろいろ聞いたんだろ、俺にわかるように説明してくれよ。

真弓：うーん。田中君から聞いたときはわかったような気がしたんだけど、人に説明できるほどわかってないから、無理。それより今度、医学部の講義にもぐり込まない？

ジュン：医学部の講義なんか聴いたって、わかるわけないじゃん。

真弓：ジュンちゃん理系なんだから、私よりはわかるよ、きっと。田中君がねえ、今度、有名な教授の遺伝の講義がある日、教えてくれるって。

ジュン：ちえっ、また、田中かよ。

真弓：遺伝の講義って、うちの大学の医学部の名物講義らしいわよ。毎年その先生の講義があるときって、全国から聴講に来る人がたくさんいるんだって。だからもぐりこんだって、わかんないわよ。ねえ、行こ。

ジュン：え——っ、医学部の講義にかあ。

真弓：(立ち上がりジュンに背を向けて、でも歩き出さない)じゃあ、いいわよ、田中君と行くから。

ジュン：(あわてて立ち上がり真弓の背中に手をかける)ちよ、ちょっと待てよ、真弓。行くよ、行くよ。

真弓：(振り向いて)ホント！うれしい！

ジュン：(指折りながらベンチに再び座る) アデニン、グアニン、シトシン…。あと、なんだっけ？(聞きながら真弓もベンチに座る)

真弓：何それ？

ジュン：DNAの塩基の種類だよ。文系でも高校でそれくらいやっただろ？

真弓：もう忘れちゃったわよ、卒業して3年も経つんだから。でも、言われてみたらそんなのあったかもね。

ジュン：医学部の遺伝の講義聴きに行くなら、少しは予習しなきゃいけないかなあ。

真弓：すごい、ジュンちゃん。やる気になってる。

ジュン：でも、あんまり期待すんなよな。

真弓：(椅子から立ち上がりながら)ありがとう。あたし、次の講義があるからそろそろ行くね。また連絡するから。じゃあね。(足早に下手に去る)

ジュン：ああ(弱々しく手を上げる)。

(暗転。ジュンにスポット)

ジュン：あーあ、まいったな。遺伝のこととか言われても、はっきり言ってピンと来ないんだよなあ。エンドウマメとかショウジョウバエとかしか、習ってないし。真弓が田中ってヤツのことばかり言うから、成り行きで一緒に医学部の講義にもぐりこむことにしちゃったけどさ、実は今、すげえ、後悔している。DNA？遺伝子？いくら理系って言ったって、俺は物理専攻だから、実はよくわからないんだ。それに、正直言って、真弓のあの気の強さ・・・俺にはやっぱり合わないのかなあとも思い始めてる。(暗転)

【シーン5：邦夫のモノローグ】邦夫の家の居間。

夜更け。邦夫はグラスを片手に持ち、うつむき加減で(カンニングができる姿勢)テーブルに斜に向かって椅子に座っている。テーブルの上にはバーボンのボトル。邦夫にスポット)

邦夫：(手に持ったグラスをゆっくり揺らしながら、しみみりと自分に言い聞かせるように)妹の真弓に、ずるいと言われるときはどきっとしました。歳が離れた妹なので、いつまでも子どもだと思っていたのですが、ずいぶん大人になったものです。真弓が通っている大学には、遺伝学の権威がいるらしく、その講義を聞きにいつてきたとも言うていました。人類みな保因者。本当にそうなのでしょう？だれでも病気の遺伝子をいくつか持っている。みんな等しく病気の子どもを持つ可能性がある。真弓は講義のときにもらってきた資料を見せてくれました。確かに読めば頭ではわかるのですが、腑に落ちません。(グラスを口にし、テーブルに置く)

悠子はすっかり、弱気になっています。あなたにこれ以上迷惑はかけられないと、泣かれてしまいました。悠子の涙を、はじめて見ました。私は、なんと言ったらいいのかわかりませんでした。黙って、そばにいてやることしかできませんでした。

このことは、だれにも言っていない。妹の真弓が知ったら、そんなことで女性を泣かせるほうが悪いと、またのしられるでしょう。真弓が言うように、わたしが優柔不断なのでしょう。明日にでもふたりで婚姻届を出してきて

しまえばいい。たしかに、それだけのことのような気がします。

(それまでの猫背を正し、声の調子を上げて)いや、決してそれだけではないのです。(遠くを見るようにして思い起こすように)反対している母の気持ちも、わからなくはないのです。結婚はふたりの問題だとしても、重い病気になる可能性があるという人と結婚しようとしている息子を心配するのは当然です。母が言うように、この病院に(パンフレットを目の前にかざしながら)相談に行くほうがいいのかもしれませんが。(パンフレットを眺めるでもなく目の前で揺らしながら、怒気を含んだ声で)しかし、行ってどうなるのかとも思うのです。悠子に、将来病気になるかどうか遺伝子の検査を受けて欲しい、とでも言うのでしょうか。いいえ、そんなことは言えません。一緒に病院に行こうなどと言ったら、それだけで悠子は傷ついてしまうにちがいません。(パンフレットをテーブル上に放り投げる)

(聴衆のほうに向き直って)どうして悠子は、病気のことをわたしに言ったのでしょうか。第一、悠子の父親の病気が遺伝する病気というのは、本当に間違いのないことなのかとも思うのです。間違いのないとしたら、悠子は、これから自分が病気になるかもしれないということを、どう考えているのでしょうか。悠子は何も話してくれません。(再びもとの姿勢に戻る)

もし逆の立場だったらどうなのだろうと、考えたこともあります。遺伝のことは自分の胸の中にだけおさめ、なにか別の理由をつけて別れるのでしょうか。そんなことが、できるのでしょうか。

悠子が病気のことを黙っておいてくれたら、と思うことがあります。知らないで結婚をして、子どもができてしまえば、母もあきらめがついたかもしれません。

自分が試されているのだということはわかります。自分にこんな問題がおきるなんて、今まで考えたことはありませんでした。(再びグラスを口にし、手にしたグラスを揺らしながら考え込む)

(スポットも音楽もそのままナレーションに移る)

ナレーション：結婚を反対されている悠子と邦夫。ふたりは、いったい、どんな選択をするのでしょうか？悠子は、自分が遺伝病の家系だということなど、知りたくなかったと思っているかもしれません。邦夫も、知らないままでいたかっと思っているかもしれません。(暗転)

ナレーション：一方、邦夫の妹の真弓と、その友達のジュン。ジュンにとっては、つきあっている彼女の、さらにその家族の問題なのに、いきなり巻き込まれた、というところかもしれません。しかし、もし自分だったら、と否応なしに考えさせられています。

自分には関係ないと思っている、あなた。そう、あなたです。本当に関係ないのでしょうか？遺伝をめぐる問題は、あなたのそばにもあるかもしれません。いいえ、きっと、あります。あなたは、悠子でしょうか、邦夫でしょうか、真弓でしょうか、それとも、ジュンでしょうか。

遺伝をめぐる問題は、あなたのそばにも、必ず、あります。

(終)

ゲノムカード 2007  
別添資料

「ゲノム・カード：あなたのゲノム、私のゲノム、個性に基づく明日の医療」シナリオ

<シーン1>

ステージが暗いうちに医師、助手、フクヤマ、案内人は所定の位置にいる。医師とフクヤマはパントマイムでやりとりをしている。助手は医師の右脇（下手より）に立ち、記録ボードを胸に抱えている。

音楽とともにタイトル、出演者がスクリーンに流れる。  
音楽小さくなり、案内人にスポット

案内人 ようこそ、みなさん。ここは未来の世界。みなさんの時代に比べて医療も大きく変わりました。診断のための検査機器の開発で、なんの痛みを伴わず体の中を検査できるようになり、再生医療の恩恵で、いまは誰でも自分の組織で移植が出来るようになりました。

（クレジットカードの半分ぐらいの大きさの金属製のカードを手にとりだして）このカードはなんだと思いますか？この小さなカード、ゲノム・カードにはあなたの医療に役立つあなた自身の遺伝情報が入っているんです。ゲノム医療が当たり前になった今、自分の遺伝子の情報をもとに病気の予防や、薬の選択、治療ができるようになりました。これをもっていればどこでも最良の治療が受けられるのです。（少しの間）すこし詳しく説明しましょう。

私たちの体は遺伝子という名前の設計図によって作られています。私たちの顔がみんな少しずつ異なることでわかるように、私達の遺伝子も実はひとりひとり少しずつ違っています。遺伝子は、A, G, C, T という4文字で表される、化学的な文字記号で構成されていて、大部分はだれでも皆同じ文字が書かれているのですが、その文字があるところでは、人によってGという暗号が、Tに代わっていたりするので。

こうしたわずかな違いをいろいろな遺伝子で調べていった結果、たとえばある場所の文字がGの人に比べて、Tの人は、糖尿病になりやすいとか、また別の場所の文字がCの人は、Aの人に比べて特定の薬で副作用が出やすい、というようなことがわかってきました。こうした研究はみなさんの時代に始まり、その後の膨大な研究のおかげで、いろいろな病気の罹りやすさ、薬の効果、副作用などのデータが蓄積されてきたわけです。

ですから今は、病院にかかるときは、このカードを持って行けば、その人の遺伝子情報をもとに、一人ひとりの体質にもっとも適した医療を受けることができます。（観客に乗り出して）みなさん、お分かりいただけましたか？..... 難しいですか？.... じゃあ、ここである家族をちょっと覗いてみましょう。

あそこに座っているフクヤマさんは、会社の健診でがんが見つかったため、今日は大学附属のクリニックを受診しています。

助手 ではゲノム・カードをお願いします。  
（フクヤマは胸ポケットから出したカードを助手に渡す。助手はもとの位置に戻りカードをコンピューターに入れる）

医師 フクヤマさん、先日お越しいただいた時の採血で、フクヤマさんの血液中を流れるがん細胞から遺伝子情報を調べ、フクヤマさんのがんにも最も効果のある治療薬を検索しました。今から結果をお示しします。

フクヤマ はい、よろしくお願いします。

医師 （しばらくキーボードをたたいているがその手を止めて）はい、これが結果です。  
（コンピュータのモニタ画面をフクヤマに見せる。フクヤマそれをのぞきこむ）

医師 （画面を指差しながら）フクヤマさんのは、幸いかなり薬が効きやすいがんですね。フクヤマさんのがん細胞に効果のある薬剤が15種類みつかりました。

フクヤマ なるほど.. あと、副作用についても調べていただけるとのことだったと思いますが...

医師 はい、そうですね。これらの薬剤のうち、フクヤマさんの体質で副作用がでないものは、3種類あります。

フクヤマ ああ、よかった。ではこれらのお薬を使っていればいいということですね。

医師 そうです。副作用が出るかどうかは遺伝的な体質によるので、今回の検査でこれについても解析ができました。以前は抗がん剤というと副作用が強くて、それも誰に副作用が出るかわからないものですから私達も苦労しました。でも今はこうしたゲノムの...

## ゲノムカード 2007

フクヤマ (さえぎるように) お話はわかりました、で、その3つのお薬を使ったひとはいままでいますか？

医師 (話しをさえぎられてちょっと不満そうに) 少々お待ちください。松本さん、全国のSDMデータベースで、調べてみられる。

助手 はい(記録ボード上のキーをたたく)、でました、先生の画面に送ります。

医師 えーっと.. フクヤマさんのがんとほぼ同じ遺伝子の特徴を持つ方では、これまでに68人が治療を受けています。そのうち60人は、完全に腫瘍が消失していますね。副作用もほとんどが薬でコントロールできる範囲のものです。

フクヤマ はあ、そうですか。

医師 すべてののがんの遺伝子の特徴ごとに、治療薬の効果に関するデータベースがあって、今までの症例は一瞬のうちにアクセスできるんです。もちろんデータベースはすべて匿名化されていますから、過去の患者さんがどこの誰かなんてことはわかりませんが、一応、この3種類を治療薬として登録しますが、よろしいでしょうか？

フクヤマ はい、おねがいします。

助手 では、ここに指をあててください。  
(フクヤマ指をボタンにあてる。効果音)

フクヤマ 先生、実は治療は家の近くでしたいんですけど..

医師 はい、よろしいですよ。では、ゲノム・カードに、いままでのデータ、承諾まで含めて記入保存しておきますね。

フクヤマ よろしくお願ひします。あと、紹介状もお願ひしたいんですが、.... でも、やっぱりここで治療をお願ひしようかな?... (不安そうな表情になる..)

(このセリフの間に医師は助手にカードを渡す 助手はフクヤマの傍らに来る)

助手 (カードをフクヤマに差し出しながら) だいじょうぶですよ。今は、このカードだけでもっていけばいいんです。このカードさえあれば、どこでも同じ治療が受けられますよ。

フクヤマ (助手の顔をみながら、カードを受け取る) わかりました。ええ、私も大丈夫だと思いますよ.....  
(少しの間) でも、やっぱり不安というか... 心の準備ができないというか... なんか怖いんだよな。

医師 確かにがんですから、ご心配は最もだと思います。昔は命を落とされたかたも多かったわけですし、以前より格段に治療が進歩したとはいえ、私達も、けっして簡単なこと、とは考えていません。ただ、いまは、遺伝子の情報をみながらその人の体質やがんの性質にあった治療が選べるので、治療成績も大変よいのは間違いないのですから.. (立ち上がりフクヤマのもとに歩みよりながら) でも、話だけでは納得できないのも当然かも知れませんが、こちらも全力をつくしますから、いつでも、分からないことは聞いてください。(医師は、フクヤマ氏の肩に手を当てる)

フクヤマ そうですね、よくわかりました。(立ち上がり、カードを顔の前にかざして)、このカードが私の命を救ってくれるんですね。  
(医師、かたわらで大きく何度かうなづく)

## <シーン2>

(家の居間。フクヤマは解説書をみながら一人で将棋を指している。妻は傍らで「ゲノムと健康」という雑誌を広げている。ふたりの手元に湯飲み)

(ジュン下手から入ってくる)

ジュン やあ、久しぶり。

妻 あらあ、ジュンじゃない、めずらしいわね、なにかあったの。

ジュン いや、別に用はないけど近くまで来たんでちょっと寄っただけさ。(将棋台をながめながら) ふうん将棋か、ずいぶん古風なゲームやってるじゃん。(椅子に腰掛けながら) そういえばお父さん、健診でがんが見つかったんだって？

フクヤマ ひとごとだと思って軽々しくいうな。本人にとったらすごいショックだったんだぞ。でもな、今は遺伝子を調べていい治療法を選べるし、お父さんの場合は飲み薬だけなんだが、この間診察にいったら経過は順調だって言われたよ。(本を見て駒を動かしながら上記セリフ。たいしたことない、というニュアンスで)

ジュン へえ、よかったじゃん。

フクヤマ ああ、やっぱり遺伝子を調べられるようになったというのはほんとにありがたいことだよ。いい時代に生まれたもんだ。

(妹のマユミ下手から入ってくる)

マユミ ただいま。

妻 お帰り、遅かったわね。

ゲノムカード 2007

- マユミ うん。あれ、お兄ちゃん久しぶり。今日はどうしたの。
- ジュン いや、別に用はなかったんだけどちょっと近くまで来たもんでね。それよりお前はどこ行ってたんだよ。  
(フクヤマは再び将棋を始める)
- マユミ (バッグを肩からおろしてテーブルに置きながら) うん、なんかさあ、この間から体調悪くてね、ずっと忙しかったせいだと思ってたんだけど、あんまり長く続くもんだからちょっと病院へ行ってきたの。たいしたことない、普通の風邪だと言われてお薬だしてもらった。(バッグから薬袋を出してテーブルに置く) あたしも前はアレルギーがひどくて薬のむのおっかなびっくりだったじゃない。でもね、最近ゲノム・カード使うようになってからは病院でもらう薬を飲んでも全然副作用は出ないし、薬もよく効くし、すごく助かってる。難しいことはよくわかんないんだけど、私の遺伝子のことがカードに書いてあるからなんだってね。
- 妻 マユミもお母さんに似て薬のアレルギーが出やすい体質なのよ。お母さんも若いころは喘息で苦労したし、いろんな薬を飲むたびにしょっちゅう具合が悪くなって大変だったの。でもマユミはゲノム・カードが使えるようになってそういうことがなくなったものね。  
(マユミうなずいている)
- 妻 お母さんが若いころに日本人の遺伝子の個人差を調べる研究というのがあってね、世間ではいろいろと反対する意見もあったけど、お母さんは喘息の体質を調べる遺伝子の研究に協力したの。ジュンやマユミに同じようなつらい思いをさせたくなかったから。
- フクヤマ (前のセリフの途中から将棋をやめ、顔をあげて妻の話の聞いている) 糖尿病とか高血圧に関係する遺伝子もそうやって調べたって言ってたな。
- 妻 そうなの。
- ジュン ふうん、遺伝子調べるのってそんなにいいんだ。実はね、最近うちの会社の課長さんが、ずいぶん若いのがんになっちゃったんだよ。それでおれもなんだか心配になってさ。そしたらこの間、通っているヘルスクラブで遺伝子検査のサービスを紹介されてさ、おれの体質に合うサプリメントも紹介してくれるっていうもんだから、この際ちょっと試してみようかと思ってるんだ。
- 妻 へえ、今はそういうサービスもあるの。いいんじゃない、お前のためになるんなら。
- フクヤマ ちょっと待った。ジュン、それは一体どういうものだ。
- ジュン (ポケットからチラシを出して広げながら) ほら、これがそのチラシなんだけどね、おれの血液をちょっととって調べるだけで将来がんになるとか心筋梗塞になるとかわかるらしいよ。
- フクヤマ どれ、見せてみる。(チラシを受け取って目をやる) なになに、遺伝子が約束するあふれる健康、かがやく未来だと。そんなばかな話があるか。健康ってのは遺伝子だけで作れるものじゃないだろう。
- ジュン そうなの？この間読んだ本では人の体質は遺伝子で決まるようなこと書いてあったぜ。それに課長さんのがんも遺伝子のせいなんだって本人が言ってたし。
- フクヤマ もちろん遺伝子の影響だけで病気になる場合もある。でもな、遺伝子で体のことが全部決まると思っていたらそれは誤解というものだ。
- ジュン ええっ、そうなのか。おれはせっかくだから子どものことも調べてもらおうと思ってたのに。早く遺伝子で体質診断して、早くから予防プロトコルをやれば病気を防げるって言われたし。
- フクヤマ 親が子どものことを心配する気持ちはわかるけどな、子どもは親の持ち物じゃないんだぞ。いくら親でも勝手に子どもの遺伝子を調べることは普通は許されないんだ。それに遺伝子で体質の診断をするときはな、信用のおける病院でよく説明を受けて、よく理解してからでないだめだ。(チラシをふりかざしながら) だいたい、こういうふうに遺伝子をいいかげんに扱うやつらがいると、せっかくのいいものも生かせなくなってしまいうだろう。
- 妻 そういえば最近のは頭のいい子やハンサムな子が生まれるとか言ってる客を集めてる会員制の遺伝子バンクとか、婚約相手の遺伝子を調べる遺伝子興信所みたいなものもあるってきいたわ。
- フクヤマ それにな、そういう会社の遺伝子検査は病院のと違ってセキュリティがいい加減だったりするとかきいたぞ。もしそんなところから遺伝子の情報が漏れたり誰かに盗まれたりすれば本人にも家族にも大変なことになるんだ。(チラシをテーブルにほうり投げる)
- マユミ (放り投げられたチラシを拾ってながめながら、あえてのんきそうに) えー、でもそんな他人のものなんて手に入れたところでなんの役にもたないんじゃないの。
- ジュン おれもそんな気がするけどなあ。
- フクヤマそこがお前たちの甘いところなんだ。遺伝子の情報というのは電話番号や口座番号なんかとは違って、外に洩れてしまったからといって消したり変えたりするわけにはいかないだろう。洩れた情報のせいでいわれない差別を受ける可能性だってある。だから遺伝子の情報管理の問題はとても重要なんだ。
- ジュン ふうん、なんだかちょっと心配になってきたな。とりあえずヘルスクラブの遺伝子検査はやめとくよ。それにしてもお父さん、詳しいね。どこでそんな情報仕入れてんだよ。
- フクヤマ ああ、最近の本を読んだり GENETOPIA という劇団のドラマを観たりして勉強してるからな。
- ジュン 劇団 GENETOPIA? 何それ。お母さん聞いたことある? (妻、だまって首を横に振る) マユミは?  
(マユミ、同じく首を横に振る) そいつらはあやしくないの?

## ゲノムカード 2007

フクヤマ あやしいかあやしくないかぐらい活動を見てればわかるさ。世の中情報があふれているんだから、確かなものとそうでないものを見分ける能力を身につけないとな。それに引き換えお前はうっかり者だし、何につけても軽率で心配だ。

ジュン でもおれがうっかり屋なのはお父さんからの遺伝だって、死んだおばあさんがそう言ってたぜ。

マユミ そうそう、おばあちゃんは、私が落し物多いのもお父さんからの遺伝なんだって言った。

フクヤマ うるさい、お前たち、余計なことを言うな。

## <シーン3>

### 再び病院の診察室

(明転すると、医師、助手、フクヤマがシーン1と同じ位置にいる)

医師 フクヤマさん、今日の検査の結果、フクヤマさんのがんは完全に治ったことが確認できました。

フクヤマ 本当ですか。大丈夫とは思っていたもののやっぱり心配だったんです。よかったあ。

医師 ええ、本当によかったですね。フクヤマさんのタイプのがんと遺伝子情報を利用できなかった時代には完治なんてとても望めなかったんです。かなり進行もしていましたね。

フクヤマ (ガッツポーズしながら) よっしゃあ。なんかまた自分の健康に自信がよみがえったような気がしますよ。(カードを胸ポケットから出し立ち上がる) ゲノム・カードには本当に助けられました。これさえあればもう怖いものなしですね。

医師 (立ち上がり、フクヤマのそばに歩みよりながら) いえいえ、遺伝子が私たちの健康のすべてを決めるわけではないんですよ。遺伝子のわずかな違いによる一人ひとりの体質の違いもさることながら、それぞれの人の体質にふさわしい生活を送る毎日の習慣がとても大切なんですよ。私たちはそれぞれの患者さんの体質にあった治療を提供するために遺伝子の情報を利用しているんです。

フクヤマ (医師から離れる方向に2、3歩あるきながら) そうでしたね、私も病気が見つかってからいろいろ勉強して、自分ではわかっていたつもりなんですけどね、うれしくてつい... (医師のほうを振り返り) ほんとうにありがとうございました。

(医師、うなずきながら握手しようと右手を差し出すが、フクヤマはそれを通りすぎて助手の右手を両手で握りしめる)

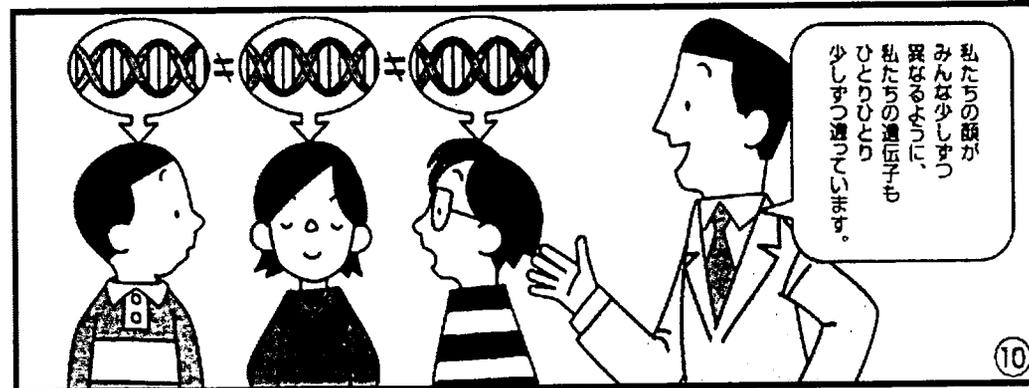
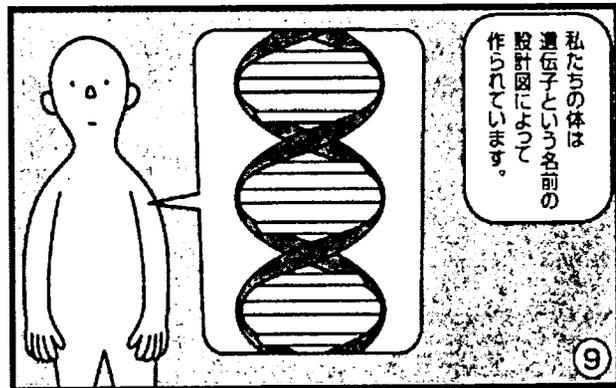
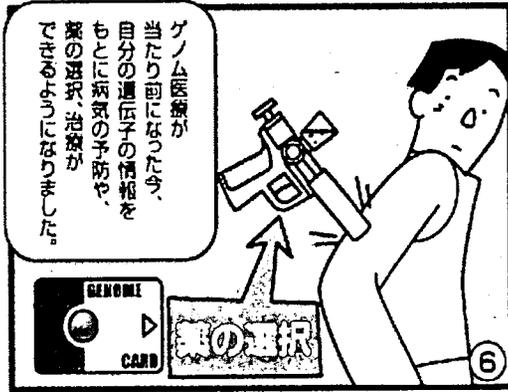
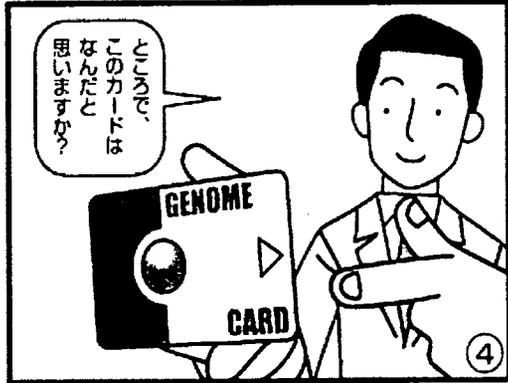
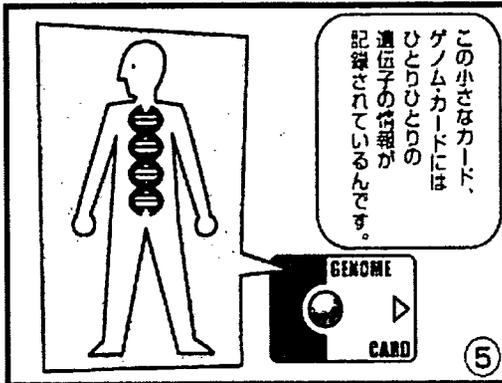
案内人 さて、フクヤマさんは遺伝子情報を利用した治療でがんもよくなり、とても恩恵を受けることができました。マユミさんも遺伝子の情報をもとに体質にあった薬で治療を受けられるようになりました。遺伝子の情報が新しい医療への道を開いてくれるのは間違いありません。今回ご覧いただいたような、遺伝子の個人差をもとに病気の診断や予防、治療を実現する医療を実現するための研究が現在、精力的に進められています。そして、こうした研究を成功させるためには現代の多くの皆さんの協力が不可欠です。

ところで、ジュン君が遺伝子を調べようとしていたのにフクヤマさんはずいぶん反対していました。同じ遺伝子を調べることなのに一体何が違うんでしょう。遺伝子の情報が有効に使われるために私たち一人ひとりが注意しなければならないこともありそうです。私たちの健康は決して遺伝子だけで決まるものではないこと、そして厳重に保護しなければならないプライバシーの問題。フクヤマさんが心配していたのはどうもそのへんのことのようにです。皆さんもぜひ一緒に考えてみてください。

### エンディングタイトル

「本ドラマは、ゲノム医学研究の医療への応用に関して、現状の理解、啓発、議論を目的に、作成されたものです。状況の設定は、現在の医療、あるいは今後の医療を必ずしも反映していません」

「本ドラマの上演にあたり、多くの先生方に貴重なご意見やご指導をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます」



研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
福嶋義光	遺伝子診断のガイドライン	編集：柳澤正義, 衛藤義勝, 五十嵐隆	小児科の新しい流れ	先端医療技術研究所	東京	2005	22-26
福嶋義光	遺伝カウンセリング	編集：松島綱治, 酒井敏行, 石川昌, 稲寺秀邦	予防医学事典	朝倉書店	東京	2005	209-211
福嶋義光	ゲノム情報と生命倫理・ガイドライン	監修：山本重夫	バイオ解析・診断技術のテーラーメイド医療への応用	シーエムシー出版	東京	2006	23-27
福嶋義光	生命倫理	編集：日本バイオインフォマティクス学会	バイオインフォマティクス事典	共立出版	東京	2006	340-341
福嶋義光	遺伝子診断を行う際の注意点	宇佐美真一	きこえと遺伝子—難聴の遺伝子診断と遺伝カウンセリング	金原出版	東京	2006	11-13
福嶋義光, 宇佐美真一	難聴の遺伝カウンセリング	宇佐美真一	きこえと遺伝子—難聴の遺伝子診断と遺伝カウンセリング	金原出版	東京	2006	33-41
福嶋義光, 玉井真理子	遺伝医療と倫理・法・社会	監修：福嶋義光 編集：玉井真理子	遺伝医療と倫理・法・社会	メディカルドゥ	東京	2007	1-215
福嶋義光	我が国の遺伝医療の充実に向けた取り組み：ガイドラインの整備と遺伝カウンセリング体制の構築	監修：水谷修紀, 吉田雅幸	遺伝医療をとりまく社会その科学的・倫理的アプローチ	ブレーン出版	東京	2007	95-101
千代豪昭・滝澤公子	遺伝カウンセラー	千代豪昭, 滝澤公子	遺伝カウンセラー	真興交易医書出版	東京	2006	1-150
千代豪昭	クライアント中心型の遺伝カウンセリング	千代豪昭	クライアント中心型の遺伝カウンセリング	オーム社	東京	2007	印刷中

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
The International HapMap Consortium(173 persons including Fukushima Y)	A haplotype map of the human genome	Nature	437	1299-1320	2005
Fukushima Y	Guidelines on Genetic Testing	Japan Medical Association Journal	48(8)	429-431	2005
福嶋義光	序文（日本臨床増刊号：遺伝子診療学－遺伝子診断の進歩と遺伝子治療の展望－）	日本臨床	63(増刊号12)	1-4	2005
福嶋義光	遺伝子解析に関する指針・ガイドライン（日本臨床増刊号：遺伝子診療学－遺伝子診断の進歩と遺伝子治療の展望－）	日本臨床	63(増刊号12)	9-15	2005
福嶋義光	遺伝子治療臨床研究指針（日本臨床増刊号：遺伝子診療学－遺伝子診断の進歩と遺伝子治療の展望－）	日本臨床	63(増刊号12)	475-476	2005
福嶋義光	遺伝子診断・治療に関するガイドライン・倫理指針	日本臨床	63(3)	389-393	2005
福嶋義光	遺伝カウンセリング（第1章 疾患ゲノム解析）	実験医学	23(4)	65-69	2005
福嶋義光	遺伝性疾患とは（特集：遺伝性疾患）	日本病院薬剤師会雑誌	41(11)	1369-1370	2005
福嶋義光	多因子遺伝病研究と診療の倫理問題（増刊：臨床遺伝学'05）	最新医学	60	2200-2207	2005
櫻井晃洋, 福嶋義光	大学病院/大学附属病院における遺伝医療（特集：それぞれの立場からみた遺伝性腫瘍の現状認識と将来の展望）	癌と化学療法	32	945-947	2005
福嶋義光, 櫻井晃洋	遺伝子診断（遺伝子医療）体制の整備 現状と課題（連載10「遺伝子診断の最前線」）	医学のあゆみ	213(13)	1135-1139	2005
福嶋義光	連載開始にあたって（連載「遺伝子診断の最前線」）	医学のあゆみ	212(12)	1085	2005
福嶋義光	総論－遺伝子診断の定義・分類および倫理指針・ガイドライン（連載1「遺伝子診断の最前線」）	医学のあゆみ	212(12)	1086-1090	2005

福嶋義光	日本人類遺伝学会・日本 遺伝カウンセリング学会 臨床遺伝専門医（特集 ：産婦人科医が関わる専 門医制度マニュアル）	産婦人科の実際	54(5)	711-718	2005
櫻井晃洋, 古庄知己, 和田 敬仁, 涌井敬子, 玉井真理 子, 川目裕, 福嶋義光	医学教育における遺伝カ ウンセリング・ロールプ レイ実習	家族性腫瘍	5(1)	51-56	2005
櫻井晃洋	遺伝医学教育, 社会啓発 －正しい遺伝の知識を広 めるために	医学のあゆみ	212(13)	1137-1141	2005
福嶋義光	出生前遺伝カウンセリング のあり方（特集；出生 前診断を考える）	産科と婦人科	73(7)	825-830	2006
福嶋義光	新生児医療に必須の遺伝 カウンセリングの基礎知 識	日本未熟児新生 児学会雑誌	18(1)	17-22	2006
涌井敬子, 福嶋義光	遺伝子・染色体検査（生 体試料の取り扱いと倫理 その3, 検査室の安全管 理）	検査と技術	34(3)	271-275	2006
The International HapM ap Consortium (composed of 72 institutes, incl uding Fukushima Y)	A second generation hu man haplotype map of o ver 3.1 million SNPs.	Nature	449	851-861	2007
The International HapM ap Consortium (composed of 72 institutes, incl uding Fukushima Y)	Genome-wide detection and characterization o f positive selection i n human populations.	Nature	449	913-918	2007
Yoshida K, Wada T, <u>Sakur ai A, Wakui K, Ikeda S, F ukushima Y</u>	Nation wide survey on predictive genetic tes ting for late-onset, in curable neurological d iseases in Japan.	J Hum Genet	52	675-679	2007
<u>Sakurai A, Katai M, Yamas hita K, Mori J, Fukushi ma Y, Hashizume K</u>	Long-term follow-up of patients with multipl e endocrine neoplasia type 1.	Endocrine Jour nal	54	295-302	2007
Kosho T, Takahashi J, Mo mose T, Nakamura A, Saku rai A, Wada T, Yoshida K , Wakui K, Suzuki T, Kasu ga K, Nishimura G, Kato H, <u>Fukushima Y</u>	Mandibuloacral dysplas ia and a novel LMNA mu tation in a woman with severe progressive sk eletal changes	Am J Med Genet	43A	2598-2603	2007
福嶋義光	遺伝学的検査実施時のガ イドライン	総合臨床	56(2)	361-362	2007
涌井敬子, 福嶋義光	検査じょうほう室 診療 支援 遺伝学的検査に関 する注意点	検査と技術	35(2)	162-165	2007

櫻井晃洋, 木村貞治, 福嶋義光, 多田剛, 相澤徹	グループワークを中心とした医学科・保健学科合同新入生ゼミナールの実施	医学教育	38(1)	23-28	2007
山内泰子, 金井誠, 福嶋義光	[臨床遺伝学 診療に必要な最新情報]産婦人科診療で臨床遺伝専門医と認定遺伝カウンセラーの役割	臨床婦人科産科	61巻9号	1106-1113	2007
和田敬仁, 福嶋義光	近親婚のリスクと遺伝カウンセリング	日本医事新報	4338	96-97	2007
千代豪昭・田村智英子	専門職遺伝カウンセラーの養成	医学のあゆみ	219(4)	276-277	2006
千代豪昭	遺伝カウンセリングの歴史	臨床眼科	60(12)	1891-1897	2006
千代豪昭	遺伝カウンセリングの目標と準備	臨床眼科	60(13)	2017-2025	2006
千代豪昭	ロジャースのカウンセリング理論	臨床眼科	61(1)	27-33	2007
千代豪昭	カウンセラーの基本的態度とコミュニケーション・スキル(1)	臨床眼科	61(2)	175-183	2007
千代豪昭	カウンセラーの基本的態度とコミュニケーション・スキル(2)	臨床眼科	61(3)	299-309	2007
千代豪昭	遺伝カウンセリングに役立つ心理介入の理論と技術	臨床眼科	61(4)	501-511	2007
千代豪昭	遺伝確率に関する情報提供とカウンセリング技法	臨床眼科	61(5)	727-737	2007
千代豪昭	遺伝カウンセリングにおける「説得」の理論と技術の応用	臨床眼科	61(6)	943-952	2007
千代豪昭	「悪い知らせ」の伝え方と援助技法	臨床眼科	61(7)	1167-1178	2007
千代豪昭	遺伝カウンセリングと倫理問題(1)	臨床眼科	61(8)	1391-1401	2007
千代豪昭	遺伝カウンセリングと倫理問題(2)	臨床眼科	61(9)	1611-1622	2007
千代豪昭	遺伝カウンセリングの記録方法	臨床眼科	61(10)	1817-1828	2007
四元淳子, 千代豪昭	遺伝カウンセリングにおける遺伝情報の収集	臨床眼科	61(12)	2009-2020	2007